フェミニズムと心理学（2）

――フェミニスト的視点からの解釈についての論考――

森　永　康　子

1．心理学の方法

これから卒業論文にとりかかろうとしている学生から、ときどきおもしろい質問を受けることがある。

「有意差が出なかったら、卒業できないのですか？」

「統計を使わなくてもいいのですか？」

こうした質問は、学生が大学で学習した「心理学」のイメージを反映したものであろう。それは、また、そういうイメージを植え付けてしまった心理学教育のあり方を考えさせるものでもある。

多くの大学で開講されている入門レベルの心理学では、実証的な研究の紹介が主ではないかと思われる。また、同時に、基礎的な心理学実験、統計学や心理統計に関する科目が、大学１年から２年にかけて必修、もしくは必修と同等の取り扱いになっている。心理学実験では、条件間の比較を行う実験の方法を学び、統計に関する授業では、「有意な結果」を見つけるために、計算式に従って計算することが求められる。こうした「原体験」とも言える授業内容が、学生にかなりの影響を与えていると思われる。おそらく大学に入るまでの学生が心理学に対してもっているイメージは、カウンセリングや精神分析、さらに、「深層心理テスト」「性格テスト」という名で広まっている占いの類いに基づいたものであろう。実証的な心理学を柱にしたカリキュラムは、こうした歪んだ「心理学」のイメージを払拭する役割を担っているのかもしれない。また、多

くの大学で心理学専攻が、いわゆる「文系」と位置づけられているため、数学が得意でないという理由で文系を選んだ受験生にとっては、入学前と後でずいぶん心理学に対するイメージが変わるのではないだろうか。

ところで、「有意な結果が出ないと卒業できないのですか」という質問は、現在の心理学界にある主流の考え方を反映しているように思える。もちろん、有意な結果が出なくても大学は卒業できるのだが、学術雑誌に投稿しようとする場合には、条件間に統計的に有意な差異あるいは主効果がないと、研究は失敗と見なされ、その論文が公にされることはあまりない。それは、ひとつには、条件間に何らかの違いがあることを想定して、研究を組み立てているからではあるのだが。

さて、ここ何年間か、心理学研究の方法論に関する専門書の出版が相次いでいる。たとえば『心理学研究法—心を見つめる科学のまなざし』（高野陽太郎・岡隆編，2004年，有斐閣）、『エンサイクロペディア心理学研究方法論』（W.J.レイ著，岡田圭二訳，2003年，北大路書房）。また、『心理学のための質的研究法入門—創造的な探求に向けて』（C.ウィリッグ著，上淵寿・大家まゆみ・小松孝至訳，2003年，培風館）、『調査的面接の技法』（鈴木淳子著，2002年，ナカニシヤ出版）などのように質的研究方法についての出版物も多い。さらに、学会の年次大会においても、方法論に関するシンポジウムやワークショップが盛んに行われている。たとえば、2004年の日本心理学会第68回大会では、「心理学の新しいかたち—心理学のアカウンタビリティをめぐって」（下山晴彦企画）、「質的心理学の未来展望」（やまだようこ・サトウタツヤ企画）、「質的研究の仕方：研究方法をどう指導するか」（柏木惠子・高橋惠子企画）といったワークショップなどが開催されている。

こうした方法論の流行には、どのような意味があるのだろうか。研究の方法、つまり、対象へのアプローチ方法は、学問の領域を決める大きな要因である。方法論についての議論が盛んということは、学問としての心理学にアイデンティティの揺らぎがあるのかもしれない。その背景にあるものが、進みすぎた

統計学についていけない心理学者が増えたということなのか、ポストモダンをはじめとする現代思想の影響があるのか、臨床心理学の主流化によって、そこで使われている研究手法が影響力を持ち始めたせいなのか、いずれにしても、方法論をめぐる議論は、主流の伝統的な実証主義的心理学を顧みる機会を提供するものとなっている。本稿では、現代思想の中のひとつである「フェミニズム」が心理学に与える影響について、著者の研究を通して論じる。そして、研究者が自分の立場を理解することの重要性について考えてみたい。

2．フェミニストの視点

フェミニズムは、20世紀に登場した思想の中でも、女性解放運動に代表される社会運動、職場や学校や家庭における身近なジェンダー格差の問題とあいまって、大きな広がりをもった。フェミニズムの本場、アメリカやヨーロッパでは、男女平等をめざす運動・思想として当初発展したが、「白人中流階級の女性」のものだという批判から、現在では、そこに人種や民族の視点も組み込まれるようになった（楠瀬，2003）。つまり、フェミニズムとは、大きな意味でとらえれば、性別であれ、民族であれ、性的指向であれ、その社会で優勢な立場にある人間（日本の場合には、それぞれ、男性、日本人、異性愛に対応するだろう）の持つ視点に対して、疑問を投げかけ、それとは異なった視点を提供するものと言えるのではないだろうか。

日本のフェミニズムは、1970年代初頭の「ウーマン・リブ」以降、社会運動として、それほど強い動きは見られなかったが、80年代に入り、アカデミックな場で発展してきた（秋山，2003；加野，2002）。しかし、それらは主に、社会学に関する領域であり、心理学におけるフェミニズムの影響は、ようやく90年代になって目立つようになってきた。性役割態度や役割分担などの研究は、それ以前にも行われてきた（たとえば、伊藤，1978；柏木，1967）が、フェミニズムという言葉が心理学の公の場で使われ始めたのは、つい最近のことである。たとえば、日本心理学会大会において「ジェンダー・フェミニズム」とい

う発表部門ができたのは、2003年の第67回大会であった。翻訳以外で、題目に「フェミニズム」「フェミニスト」のつく出版物は、「フェミニスト・カウンセリング」と呼ばれる臨床心理学（カウンセリング）領域以外に、柏木恵子・高橋恵子（編著）『発達心理学とフェミニズム』（1995年，ミネルヴァ書房）などがあるだけだ[1)]。

では、フェミニズムの影響とはどのようなものなのか、具体的に考えていきたい。その例として、1991年に行った調査結果（森永，1994，2000）を用いよう。これは、男女大学生に、仕事のどのような側面を重視するかを尋ねたものである。用いた仕事の側面（尺度）と質問項目は以下の通りである。『待遇・職場の条件』には「給料がよい」「経営が安定している」など5項目。『キャリア』は「仕事で認められるようになる」「単に働くというのではなくキャリアや業績を積むこと」など5項目。『社会貢献』は「他人の役に立つ」「仕事を通して社会へ貢献できる」など4項目。『知的刺激』は「仕事の内容に変化がある」「知的な刺激がある」など5項目。『家族に配慮できる仕事』は「家族と一緒に過ごせる時間が多くとれる」「育児休業制度がある」の2項目。それぞれの項目に対して、自分にとってどのくらい重要かを5段階で尋ね、それぞれの尺度に含まれる項目の平均値をもって尺度得点とした。表1は、男女ごとの尺度得点の平均値、標準偏差、およびt検定の結果を示している。なお、得点範囲は1～5であり、得点が高いほど、その側面が重要だと回答したことを意味する。

平均値の差の検定により男女の得点の違いについて検討したところ、『キャリア』の尺度を除き、他の4つの尺度において統計的に有意な性差が見られ、いずれにおいても男子より女子のほうが得点が高いことが示された。

以上がおおまかな結果であるが、この研究を行ったそもそものきっかけは

---

1) もちろん、「ジェンダー」が題目に入った出版物は、心理学においても、青野篤子・森永康子・土肥伊都子（著）『ジェンダーの心理学』（2004年，ミネルヴァ書房）、柏木恵子・高橋恵子（編）『心理学とジェンダー』（2003年，有斐閣）など数多い。

表1　仕事に関する価値観の男女ごとの平均値，標準偏差及び t 値

	女　性 (N=291)	男　性 (N=329)	t
待遇・職場の条件	4.17 (0.65)	4.02 (0.74)	t (617.9)=2.71**
キャリア志向	3.80 (0.70)	3.89 (0.68)	*n.s.*
社会貢献	3.90 (0.73)	3.77 (0.82)	t (618.0)=2.11*
知的刺激	4.15 (0.62)	3.81 (0.68)	t (618.0)=6.32***
家族	4.40 (0.78)	3.74 (0.92)	t (616.7)=9.56***

5段階尺度，得点が高いほどその尺度についての重要性が高いことを意味する。
（　）内は標準偏差　*p<.05　**p<.01　***p<.001
（森永，2000より）

「女性は就労意識が低い」と言われることへの疑問であった。男性に比べると、「勤続年数が短い」「転勤を好まない」などと働く女性に対する批判は多い。しかし、この調査からは、『キャリア』を除く4つの側面で、女性の得点の方が高いという結果が得られており、さらに男性の得点の方が高いという側面はなかった。つまり、この調査の対象となった大学生に限れば、女子は男子よりも、仕事の待遇・職場の条件、仕事を通しての社会貢献、仕事から得る知的刺激、家族に配慮できる仕事というような側面に高い価値をおいているのである。もし、こうした側面を「就労意識」と見なせば、女性は男性よりも就労意識が低いとは言えないだろう。むしろ、女性の就労意識は男性よりも高いとも解釈できるのである。さらに、男性の「就労意識」を、働くのは当たり前という男性の役割規範に沿ったものと考えてみてはどうだろうか。同じ調査で検討した性役割態度と価値観との相関係数は、女子よりも男子において、両者の関係が強いことを示している（表2）。たとえば、性役割に関して平等主義的な態度をもつ男子ほど、知的刺激や家族の側面に価値をおいており、こうしたことから伝統的なジェンダー規範の受容度が男性の就労意識に関連している様子がうか

表2　仕事に関する価値観と性役割態度の相関係数

	女　性 (N=291)	男　性 (N=329)
待遇・職場の条件	.03	−.19***
キャリア	.16*	−.11*
社会貢献	.06	.02
知的刺激	.26*	.16**
家族	−.04	.20***

性役割態度は、女性に対する態度を尋ねたAWS（Attitudes toward Women Scale; Spence&Helmreich, 1972）の18項目。*p<.05 **p<.01 ***p<.001
（森永，2000より）

がえる。女性的特性のステレオタイプと言われる「従順さ」（伊藤，1978）も、それが、経営者や上司の命ずることを黙ってきく従順さと解釈するならば、男性的特性のひとつであるとも言えるのではないだろうか。

次に、表1の中にある『家族』の側面に焦点を当てて考えてみたい。この側面については、統計的検定の結果から、男子よりも女子の方が重視していると推測できるし、また、女子の中だけで比較しても、他の側面に比べて、『家族』の得点が最も高くなっており、女子大学生が仕事を選ぶ際に家庭との両立ができるものかどうかをかなり考慮している様子がうかがえる。では、この結果を、現実社会に当てはめたときに、どのようなことが考えられるだろうか。

第一にあげられるのは、女性は家族を中心に考えているのだから、もし、家庭と仕事の両立ができないならば、あるいは、仕事よりも家庭が大切だと思ったら、仕事を辞めるだろう。だから、継続が要求される重要な仕事に女性は割り当てられない。もし、家庭を犠牲にしないように働きたいならば、子どもの帰宅時間に合わせて働くことのできるパートタイムが望ましいだろうというような考え方である。これは、男女の賃金格差や管理職者全体に占める女性の割

合の低さ、女性労働者の多くがいわゆるパートタイムと言われる短時間労働者である、というような現状を肯定するものだろう。つまり、一部の経済的な強者を支持する考え方であり、「家庭の責任は女性にある」という社会規範をさらに強めるものだろう。

第二に、女性が家族のことを気にすることなく仕事できるように、職場の環境や労働条件を整えるべきだという考えがある。特に、近年の出生率の低下の原因として、女性を取り巻く就労環境が整っていないことが指摘されている。法律で認められている１年の育児休暇ではあるが、収入のない状態となり、社会保険も打ち切られる職場が多い。そのため、多くの女性が、子どもを産まないという選択をしたので、出生率を上げるためには、働く女性の育児を支援する制度が、企業や地域など社会全体で必要であると論じられる。確かに、働く女性を取り巻く環境を整えることは必要である。しかし、忘れていけないのは、子どもを産み、育てる責任を負っているのは、女性（母親）だけではないということだろう。

このように考えると、男性は、なぜ女性のように家族に配慮できる側面を重視しないのかという疑問がうかびあがる。これが第三の考え方であり、フェミニズムの視点を取り入れたものと言えるだろう。過労死するほどの長時間労働を強いられている男性労働者の多くは、「家族を養うため」と思いながら働いているのであろうが、家族がはたしてそこまでして働いてほしいと思っているのかは疑問である。「男性は外で働き、女性は家庭を守る」という役割分担は、男性にも女性にもかなりの負担を強いるものである。家庭あるいは自分自身を大切にする働き方を、男性も目指すべきであろう。

３．終わりに

本稿では、どのように現実社会の中で研究結果を考えるのかという点について、ひとつの研究結果を取り上げ考えてみた。ひとつの結果をめぐっても、さまざまな解釈や提言が可能である。そして、それらは、多かれ少なかれ、研究

者の立場が反映される。このことは、これまでの心理学教育の中ではほとんど触れられずにきており、その結果、研究者自身が独力で気づくことがなければ、自分がどのような立場から研究を行っているのかについてほとんど無自覚のまま、研究が行われるという事態に陥る。

心理学の研究方法に関する説明では、「科学」「客観性」という言葉がよく使用される。それは、研究と現実の社会は関係がないという意識を学生、ひいては教育者である研究者に植え付けがちである。しかしながら、研究テーマや方法の流行は、現実社会を反映し、その時代の要請に応じたものとなっている。たとえば、集団知能検査は、兵士を選抜するために作られたし、態度変容や説得の研究は、戦争中、効果的なプロパガンダについて考えるものであった。また、先に報告した研究も、もとをたどれば、大学におけるキャリア・カウンセリングやそれについての研究の盛んなアメリカでの研究や理論にたどりつくことができる。

心理学の研究は、多くが人間社会の中で見られる現象を検討するものである。つまり、社会背景を抜きにしては考えられないものであるのに、「客観性」を強調することによって、研究者に自分の立場に無頓着であることを許す言い訳が作り上げられているのではないだろうか。また、日本では、米国で作られた理論やモデルを取り入れて研究することが多い。そうした理論やモデルが、どのような社会背景をもとにして作られたのかというところまではあまり考慮されず、それらを基に仮説を立て、データをとるというやり方が取られるために、さらに社会から切り離された研究になってしまうのだろう。

これまでフェミニスト心理学者によって、研究者のもっている立場が、研究のあらゆる段階で影響を与えることが指摘されてきた（たとえば、Lips, 1999；Yodar, 2003）。どのような領域の研究に興味をもつのかというところから始まり、研究をするにあたっての疑問（リサーチ・クエスチョン）、利用する方法（実験法、観察法など）、結果の解釈のいたるところに、研究者のもっている視点や立場が入る。研究者が意図しようとしまいと。それは、「女性と男性

は異なる」「男性が基準（標準）で、女性はそこから逸脱したもの」というような視点から行われてきたこれまでの心理学研究への批判でもある（こうした点については、森永，2003をご覧いただきたい）。もちろん、ジェンダーだけでなく、年齢や国籍などでも、同じような問題が生じているだろう。「客観性」を隠れ蓑にすることなく、こうしたことを自覚した上で研究をする必要性があるのではないだろうか。

引用文献

秋山洋子　2003　ウーマン・リブ　奥田暁子・秋山洋子・支倉寿子（編著）『概説フェミニズム思想』　ミネルヴァ書房　pp. 195−196.

伊藤裕子　1978　性役割の評価に関する研究　教育心理学研究，26，1−11.

柏木惠子　1967　青年期における性役割の認知　教育心理学研究，15，193−202.

加野彩子　2002　日本の一九七〇年代〜九〇年代フェミニズム　江原由美子・金井淑子（編）『フェミニズムの名著50』　平凡社　pp. 501−518.

楠瀬佳子　2003　第二波フェミズムの広がり　奥田暁子・秋山洋子・支倉寿子（編著）『概説フェミニズム思想』　ミネルヴァ書房　pp. 215−234.

Lips, H. M. 1999 *A new psychology of women: Gender, culture, ethnicity.* California: Mayfield Publishing Company.

森永康子　1994　男女大学生の仕事に関する価値観　社会心理学研究，9，98−105.

森永康子　2000　『女性の就労行動と仕事に関する価値観』　風間書房

森永康子　2003　フェミニズムと心理学　女性学評論，17，115−129.

Spence, J. T., & Helmreich, R. 1972 The Attitudes toward Women Scale: An objective instrument to measure attitudes toward the rights and roles of women in contemporary society. *JSAS Catalog of Selected Documents in Psychology*, 2.

Yoder, J. D. 2003 *Women and gender: Transforming psychology (2nd ed.)* New Jersey: Prentice Hall.

付記

本稿は、本学大学院人間科学研究科で開講されている「人間科学合同演習」における発表（2004年10月４日）を基に執筆したものである。

Summary

Feminism and Psychology (2):

A Short Essay from a Feminist Perspective

Yasuko Morinaga

Questing for an alternative methodology is one of today's challenges for the traditional and mainstream psychology. An introductory level of psychology education in colleges has historically focused on rigorous research methods including traditional psychophysics experiments and statistics. Psychology students typically acquire the attitudes of a 'value-free-scientist' through college courses emphasizing the aspects of 'scientificness' and 'objectivity' in research. In this short essay, author describes how feminism has influenced psychology showing the three ways of constructions on her own research data, and suggests how the research results can contribute to a social change. The importance of acknowledging her/his own standpoint as a psychologist is also discussed.